

湘北短期大学 高大連携通信 Vol.12

平成28年
10月1日(土)発行
湘北短期大学
リベラルアーツセンター
E-mail: LAC@shohoku.ac.jp
TEL: 046-247-3131
FAX: 046-247-3667

意義深かった教育研究会

リベラルアーツセンター長 小棹理子



湘北ナビットくん

第7回高大連携教育研究会

「アクティブラーニングの深耕と評価法」

1. 日時:平成28年9月5日(月)15時~17時
2. 場所:湘北短期大学 図書館
3. 内容:
 - ・高校におけるアクティブラーニングの進展
 - ・「教育に対する価値観に関する制度的・政策的・社会的状況とアクティブラーニング」
 - ・生活プロデュース学科 佐藤 知条
 - ・ルーブリックの多面的活用

総合ビジネス・情報学科 小棹 理子
・意見交換

4. 出席者:連携校5校6名、大和市立引地台
中学校2名、本学教職員9名、計17名

1年半前に本学で講演いただき、大学内でも大きな反響を呼んだ「高校におけるアクティブラーニング(AL)の実践」。今回はその続編として再度小島先生にご登壇いただき、「藤沢清流高校におけるALのセカンド・ステージ」を伺いました。

【これまでの取り組み】

ALにより、90分授業における授業者の創意工夫を喚起し、組織的な授業改善が可能になり、結果として生徒全体の学力向上が期待できることが導入の背景。藤沢清流高校は、平成25~27年の間、「確かな学力向上推進(AL)に基づく」研究推進校に選定された。同校では「AL型授業の方法は統一せず」に、各教科で検討をし、アイデアを共有し、さらに新たな方法により改善を試みる、というサイクルが構築された。

【学校での教育活動すべてがキャリア教育】

進路について考え行動させる指導だけでなく、AL型授業を教科に取り入れることで生徒のジェネリックスキル(汎用的能力)を伸ばし、将来社会で活躍できる人材となることができるような教育を行っている。そのために、「知識を活用して問題を解決する能力」と「人と自分にベストな関係をもたらそうとする力」を測定するための「学び未来PASS(河合塾)」のPROG-Hを導入、調査を開始した。

【リーダーシップ教育】

「リーダーシップ」とは、役職についている者や特定の権限を持っている者だけが発揮するものではなく、かかわっている者全員がそれぞれの役割を理解して行動を起こすこと。「目標の設定と共有」、「率先垂範」、「同僚支援(環境整備)」の三要素からなる。同校では、株式会社イノベストと3年間の連携を結び、今年度より部活動に「リーダーシップ教育」の導入を試みている。

平成28年から「県立高校改革実施計画(二期)」の「授業力向上推進重点校」として3年間の新たなチャレンジが始動した。

(裏面に続く)

【もっと詳しく知りたい方へ】

講演者の発表資料はホームページで公開しています

◎ SCOPP 湘北カレッジ・パス・プログラム

<http://scopp.shohoku.ac.jp/>

次に、「AIがどのような社会的・制度的・政策的な諸要素との関係のうちに成立し、それは実践の展開でいかに影響をなさるのだろうか」という、これまでとは異なる切り口から佐藤が考察・問題提起しました。

一九八四―八七年の臨時教育審議会から「個人の自由な選択と競争に基づいた教育の再編」が提言され、格差教育の導入が進展した。一九九七年には、文部省（当時）が、「学校制度の複線化構造や柔軟化・強力化を進め、子どもたちや保護者の主体的な選択の範囲を拡大していくことが、各人の能力・適性に応じた教育を展開する上で重要」と答申を発表。市民の価値観が変化し、教育をサービスとしてとらえるとともに、より良いサービスを提供する学校が良い学校であるという考え方・価値観が醸成された。二〇〇〇年以降は、長引く不況と個人の孤立により、「個人の自己実現」が結びつかなくなつた。AIが求められるようになった背景として、「コンピテンシー（現実社会で有用な能力）の獲得」と「未来の効用」があげられるが、「必要性の理解」と「消費者の要求」が相容れない可能性もある。とくに、学校教育で測っている「学力」でこどもの能力と可能性を評価できるのか、という問題が残る。



最後に、第7回に引き続き「ルーブリック」がテーマでした。前回アンケート結果を踏まえ、より一般的な話を主として小棹が多面的活用を紹介しました。とくに強調されたのは、「授業で学生に獲得して欲しい能力・スキルを学生に明示する役目」です。

大学での「学修成果の評価および卒業の認定に当たっては、客観性および厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示し、その基準にしたがって評価を適切に行うこと」が求められている。標準的なルーブリックでは、「評価観点」と「評価尺度」のマトリックスで表示されるため、学生に対し授業で獲得すべき能力・知識が明確に示される。授業開始前に学生に提示することが重要である。採点のスピードアップや、複数教員で担当する科目における評価の公平性が保たれることも期待できる。もちろん、ルーブリックの活用が向いていない授業もある。PDCAにより、適宜改訂を行っていくことも重要なポイントになる。

意見交換では、各校での実施状況などが紹介されました。「教員が一方的に話さなくなると生徒間で教えあいが始まる例が見られた」、「形式からAIに入る高校もある」、「逆にAIがマンネリ化してグループの中で他人任せにする生徒が出る」、「中・高・大でのAIの状況が良く分かった」、「AIが上手な先生はそもそも旧来の授業も上手」など、興味深い話が多く聞かれました。その他にも「ルーブリックを初めて知った」、「入試で真の学力は測れるのか」、など多岐にわたる約一時間、有意義な意見交換ができました。（了）

一日体験授業の報告

7月11日(月)に川崎市立川崎総合科学高校の情報工学科2年生34名と高木先生・津久井先生を迎え、今年も「一日体験授業」が開催された。

当日は、10時に本厚木駅より本学のスクールバスで来学、10時20分から全体説明、11時より「3Dコンピュータグラフィックス」を在学生とともに受講、キャンパスレストランで昼食をとったのち12時30分から学内見学。新装成ったばかりのオフィスワーク演習室、図書館、キャリアサポート(就職)部で説明を受けたのち、通常は見ることのできないネットワーク管理室に案内。情報工学科の生徒さんならではの興味の高さに説明者も熱が入った。

特別講義では、今年入学した情報メディア学科1Tプログラミングフィードルの先輩の説明を受けたのち、ソフトバンクのロボット、Pepper(ペッパー)のプログラミングを体験。Pepperの上手な教員紹介に拍手が起った。

二〇一二年より開始されたこのプログラムも5回目となったが、毎年何かしら新しい発見を持ち帰っていただいているようだ。

